

ともに生きる ともに創る 共生共創通信

VOL.16

個性、とことん
舞台、どくどく。
ともに生きる ともに創る
共生共創事業



撮影：加藤甫

「読み聞かせ」を
異なる文化の
架け橋に

川崎市
特集号

「THE アート・プロジェクト多文化読み聞かせ隊」は、川崎市高津区を拠点に活動する団体です。「インターナショナル・フェスティバル in カワサキ」や「アーサフェスタかながわ」を始めとするイベントに参加し、多文化にまつわる絵本の紹介やワークショップ、多言語での絵本の読み聞かせなどを行っています。

活動がスタートしたのは2011年。2010年の秋から2011年3月に三沢さんが開催していた「川崎市市民自主学級読み聞かせ隊養成講座」のメンバーとともに結成しました。

現在は代表の三沢さん、副代表の塚本さんの他に、ブラジル、ボリビア、ドイツなど多様な国籍を持つメンバーが参加しています。また、その時々で、メンバー以外にも様々な能力や技術がある人達とコラボレーションしながら活動の幅を広げています。

公演情報

失われゆくものへのノスタルジーを描く。 綾瀬シニア劇団Hale 第4回公演 『ジャマナモノ ナカナカナモノ』

綾瀬シニア劇団Haleが、12月に新作を上演します。今回の作品のテーマは、デジタル化が進む世の中で、少しずつ失われてゆく質量のあるもの。代表的なものとして「本」を中心モチーフとして扱い、本自体を小道具として登場させたり、小説の朗読を織り交ぜたりしながら、失われゆくものたちのショートストーリーを重ねるように描いていきます。

公演のタイトルや料金も劇団員みんなで話し合いながら決めているというHale。劇団員自身のエピソードから物語を構成するスタイルも特徴的で、今回も人生経験から紡がれたシーンが随所に登場します。

「60歳以上が所属するシニア劇団ですが、かなり身体性を要求しているシーンもあります。全身を使って大騒ぎをしたり、静寂を表現したり。その対比もみどころです」とプロジェクトリーダーの倉品淳子さん。「観劇される方自身の失われゆくものへのノスタルジーや思い出とつながれたらいいですね。ぜひ、想像力を膨らませながらご覧ください」。



撮影：泉山朗士

第3回公演「Hale版 しあわせの王子」より

日時：2023年12月2日(土) 14:15開演
12月3日(日) 14:15開演
場所：綾瀬市オーエンス文化会館大ホール
構成・演出・プロジェクトリーダー：倉品淳子
出演：綾瀬シニア劇団Haleメンバー
料金：1000円(日時指定・自由席・当日精算)
予約受付・お問合せ：お名前、電話番号、メールアドレス、ご希望日時、枚数を以下のいずれかの方法でご連絡ください。
予約フォーム <https://krs.bz/kanagawaaf/m/hale2023/>
TEL 080-5885-3373 メール kyoso@kanagawa-af.org

2023年度神奈川県 共生共創事業 今後のラインアップ

神奈川県では、年齢や障がいなどにかかわらず、すべての人が舞台芸術に参加し楽しめる「共生共創事業」を実施しています。

2023年12月2日(土)、3日(日) 演劇
綾瀬シニア劇団Hale
第4回公演『ジャマナモノ ナカナカナモノ』
綾瀬市オーエンス文化会館 大ホール

2024年1月27日(土) ダンス
チャレンジ・オブ・ザ・シルバー
小田原公演『Largo～新しいトーン』
小田原三の丸ホール 小ホール

2024年2月2日(金)、3日(土) 演劇
小田原シニア劇団チリアクオールディーズ
『常盤木の風』
小田原三の丸ホール 小ホール

2024年2月上旬(予定) 影絵・映像
やまゆり園×劇団かかし座
『影絵であそぶ2023』(仮)
オンライン配信

2024年2月下旬(予定) 音楽・映像
スプラウト×若鍋久美子
『音の探検隊2023』(仮)
オンライン配信

自主公演 演劇
2024年3月23日(土)、24日(日)
横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」
第7回公演『EMクラブ』
ヨコスカ・ベイサイド・ポケット

お問合せ
公益財団法人神奈川県芸術文化財団 電話 045-306-6811(平日 10:00~18:00)
社会連携ポータル課 ファックス 045-663-3714
〒231-0023 横浜市中区山下町3-1 メール kyoso@kanagawa-af.org
神奈川県民ホール内

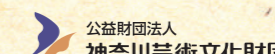
<https://kyosei-kyoso.jp>



主催 神奈川県 企画製作 公益財団法人神奈川県芸術文化財団 発行 2023年11月 編集・ライター 橋本誠、福井尚子 デザイン 水澤充 (MYG round inc.)



ともに生きる社会
かながわ憲章



令和5年度 文化庁
文化芸術創造拠点
形成事業

やまゆり園×劇団かかし座 『影絵であそぶ2023』(仮)

劇団かかし座の飯田周一さんに活動についてうかがいました。



©Martin Uri/NC22



津久井やまゆり園でのワークショップの様子

Q1 2年目となる、やまゆり園でのワークショップ。これまでどのように進めてきましたか？

まずは影絵ってなんだろ？ということを知ってもらうために、私たちがパフォーマンスをした後に、手影絵から始めました。両手を使って鳥やカニなどの姿を表現する手影絵は、手遊びの要素もあり、影絵に親しみながら始めることができます。手を開く動作が難しい方には、影絵の人形の棒を持って動かしてもらいました。毎回取り組みを少しずつ変えながら、楽しんでもらうことを目指しています。

Q2 今年度は、どのようなことに取り組んでいますか？

今年度は小さな作品づくりに挑戦しています。「四季の歌」というタイトルで、春夏秋冬の影絵の背景の中で、動物たちが歌ったり踊ったりする作品です。影絵には参加しなくても歌うことがとても好きな方がいるので、そうした方にも参加してもらえようとしています。

Q3 ワークショップの回数を重ねる中で、参加者の方に変化はありましたか？

はじめは前に出るのをためらっている方がいたのですが、他の参加者が映した影が動いているのを見たり、拍手を聞いたりしているうちに、「やってみる」と自分から立ち上がってくれました。楽しそうだなと感じてくれたのだろうし、みんながやっているのを見て、私にもできるかなと思ってくださったのかもしれないですね。

継続して開催しているので、「これはこうやるんだよね」と自信を持って取り組む方も増えてきました。なか／

には開始前の早い時間に会いに来てくれる方もいて、楽しみにしてくださっているんだなと感じています。

Q4 影絵のどのような魅力がやまゆり園のみなさんと相性が良いと感じていますか？

影を映すことは誰にでもできて、そして自分が映しているものが自分で見えるというところですね。つくった手の形が影になってスクリーンに映ったときに、演じている方の目がパッと開いたり、ニコツと表情が変わったりする瞬間があるんです。

みなさんがこう映してみようかなと工夫している姿を見たり、もっとやりたい!と仰ってくださるのを聞いたりすると、やってよかったなと強く感じます。

やまゆり園×劇団かかし座『影絵であそぶ』とは

日本で最も歴史ある影絵専門劇団「劇団かかし座」が、県立障害者支援施設のやまゆり園でワークショップを行うプロジェクト。2022年度、津久井やまゆり園と芹が谷やまゆり園にて実施し、その様子を追ったドキュメンタリー映像を公開。2023年度は津久井やまゆり園にて連続ワークショップに取り組むほか、芹が谷やまゆり園などでも単発ワークショップの実施を予定。津久井やまゆり園の参加者による作品「四季の歌」を含む、2023年度の様子は、神奈川県公式YouTubeチャンネル「かなちゃんTV」にて2024年2月上旬に配信予定。



2022年度の映像はこちら！

「みんなのスマイル・コンサート」が開催されました

「音楽を聴くだけでなく、身体も使って参加できるのがよかったです」(神奈川県立藤沢支援学校 鎌倉分教室・生徒)

「子どもたちのいい顔がたくさん引き出されていて嬉しかったです」(神奈川県立平塚支援学校・教師)

「児童生徒が生音楽に触れて、キラキラした表情で身体ごとリズムに乗り、嬉々としている姿を見て、こういう機会はとても大切だと感じました」(神奈川県立平塚盲学校・教師)

2023年9月12日(火)に茅ヶ崎市民文化会館で開催された、神奈川県立フィルハーモニー管弦楽団のコンサート。当日は会場周辺の特別支援学校に通う児童・生徒が来場し、演奏にあわせて合唱や手拍子を楽しみました。



共生共創通信 「読み聞かせ」を異なる文化の架け橋に

自分を大切に、相手も大切に。絵本やアートの力を通じて実現したい多文化共生とは



三沢さん自身が多文化に関心を持っていたことになったひとつのきっかけは、子育ての時期をオランダとアメリカで過ごしたことでした。世界中から人が集まる都市で、多様な文化的背景を持つ人々との交流があり、帰国後には、外国にルーツがある子どもたちに日本語や勉強を教える活動を始めました。そのなかで忘れられない言葉があると話します。

「小学校4、5年生ぐらいのスペイン語圏出身の女の子が将来コンピュータに関わる仕事をしたいと言っています。彼女は日本語が得意ではないから、学校の授業についていけず、算数も全然できないし、字もほとんど書けなかった。『じゃあ頑張って勉強しようね』と声をかけたら、『私バカだから』と言っています。それを

聞いたときにショックで。そんな風に思い込んで大きくなってしまいうちの子もたちがたくさんいるんだと気付かされました。この子のために何が出来るだろう、と考えた三沢さん。「スペイン語の絵本を読んで、私にスペイン語を教えてほしい」と伝えます。「絵本だったら割とシンプルなスペイン語だから読めるかなって。そうしたら彼女の態度がガラッと変わって、意気揚々と『あのね、じゃあここを読んでみて』と私に言うんです」。このとき、自信を取り戻した女の子の輝く姿を見たことが、異なる文化の架け橋として絵本の読み聞かせ活動を始めるきっかけになりました。

THEアート・プロジェクト多文化読み聞かせ隊

2023年5月に、これまで拠点としてきた川崎市高津区梶ヶ谷のコミュニティカフェ「カフェイズミ」から同区の末長にある「末長市営住宅コミュニティスペース」へと移転。毎週火曜日に金曜日に、地域の方が絵本を読んだり、おしゃべりをしたり、くつろげる場所を提供している。

神奈川県川崎市高津区末長2-15-3
末長市営住宅3号棟1階 コミュニティスペース
<https://theartproject.jp>

くことが大事だなど思っているんです。言葉を持つことが、自分自身を生かしていくことにもつながっていくので。さらに自分を大事にするということは、相手も大事にするということ。それが本来の意味の多文化共生だろうなと思っています。読み聞かせ隊の活動に加え、バレエの先生や様々なイベントの企画など、三沢さんの活動は多彩です。

以前拠点にしていたスペースの近くに養護学校(現在は特別支援学校)があったご縁から、2016年より、障がいのある若者たちを中心に、お芝居や歌のワークショップを行う「つながり隊」の活動を開始。2022年は、パントマイムやダンスを取り入れた演劇「しらゆきひめ」を上演し、好評のうちに幕を閉じました。

私たちが訪れたこの日も、養護学校出身のひとりの青年がコミュニティスペースで過ごしていました。ノートに詩を書き溜めていて、作品はすでに1000以上もあるそうです。青年に朗読をリクエストすると、たくさん作品の中からお気に入りの詩を聞かせてくれました。

読み聞かせ、演劇、ダンス、居場所づくりと様々な活動を展開する三沢さんは「色々なことをやっているように見えると思うのですが、根っここの部分ではひとつなんです」と笑顔を見せます。

「外国につながるりのあることのほかに、障がいのある人や生きづらさを抱える人など、様々な背景を『多文化』と捉えています。これからも多様な人たちと地域社会の中で共生していくことを目指していきたいです」。